

『大抵御覽』注釈稿(中)

伴野 英一

(国語・国文学)

(令和三年一月四日受理)

はじめに

前号に続き、安永八(一七七九)年刊、朱楽館公・朱楽宿寐(朱楽菅江)作の『大抵御覽』に注釈を施す。上・下の二回で終える予定であったが、紙幅の都合から三回に分けることとなった。底本書誌などについては前号を参照していただきたい。

本稿作成にあたっては底本を借覧させていただいた所蔵者に改めて感謝する。また、未だ至らぬ点多いので大方のご批正を乞う。

翻刻凡例

- 一、翻刻にあたっては可能な限り底本通りにすることを目指した。誤脱と思われる箇所も底本通りに残し、語釈において指摘した。
- 一、丁移りはその丁の表及び裏の末尾に、表であれば(吉才)(八才)、裏であれば(吉ウ)(八ウ)などと、底本の丁付通りの漢数字

と表裏の略記を組み合わせて示した。なお丁付を欠く場合は(丁付なし才)などとした。

- 一、句読点は底本通りとした。
- 一、仮名は現行の平仮名に改めたが清濁は底本通りとした。明らかに片仮名で表記しようという意識をもつて書かれたと思われる片仮名は底本通りとした。

一、繰り返しを表す反復記号などは底本通りとした。
一、漢字は原則として新字体に置き換えた。ただし特記すべきだと考える表記については語釈において指摘した。

一、作品・引用文中に現在の人権意識にそぐわない語句・表現があるが、歴史的資料である原文を尊重してそのままとした。

《翻刻》

千早ふる神代のことやありけん 朝和波 夕波尊 新大橋の上より鍋のぞきの様にのそぎ給へは浅草川の川下三又江の川上に一ツの洲あり則こゝを中洲といふその洲鶏卵のふは〱のことし 尊大 きなる銅杓子にてこれを搔廻し給へは忍ふは〱凝て新地となる扱うまさうなる地面かなと 朝和波の尊(丁付なしオ)の給ひければ夕波の尊 日 所の地祇に命じて種々の食物を任込せてたかまの腹のへつた時は四季折〱に天くだらんと給しより四季菴の生簀魚みちて躍りすみやの乙女袖を翻してまねくきん〱たる衆中は河洲にあまりぶき〱せぬ麦飯は丸屋てしこむ唐和の卓子台は四ツ足の数に入(丁付なしウ)らず魚飯の台所は三まいにおろして料る藤よしへ這入ば松源て送るあちらか四こくの讃岐屋なればこちらは武蔵川越屋楽庵の座舗ふさかれは福寿は門さして売切たり今を日の出屋だん〱福富松は葉かへぬ常盤屋に夢に見てさへ三茄子や丹波やかみ様いそかしく常陸や大酒とや〱(丁付なしオ)来るその足もとはよる万屋どんふり大鉢台の物大尽舞を見さいなと松か門のどつさくさいく万年屋家〱の栄へははてしもなら茶見世 定て神慮に叶ふべし

《語釈》

●千早ふる―枕詞。「神」「神代」「神無月」などにかかる。以降はいわゆる「国産み」の神話に拠った行文。●朝和波 夕波尊―伊

弉諾尊、伊弉冉尊をもじった名。水辺なので歌語の「朝風」、「夕波」とした。「此一柱の神天の浮橋に立し天の瓊矛をもて青海原を探り給ひしかば其のしたゞり凝り固りてひとつの嶋となれりおのころ島といふ今の淡路の国これなりそれより二尊この嶋に天降たまひ左右にめぐりて天地の儀をさだめはじめてみとのまくぼしして国土を生まれし(天保二(一八三一)刊『永代節用無尽蔵 真草両点』)。

●新大橋―隅田川にかかる橋(東京都中央区浜町・江東区新大橋)。現在の橋は以前より川下にかかっている。広重の『名所江戸百景』中「大橋あたけの夕立」に描かれて有名。「兩國橋より川下の方浜町より深川六間堀へ架す長凡百八間あり此橋は元禄六年癸酉始て是をかけ給ふ兩國橋の旧名を大橋と云故に其名によつて新大橋と号らるゝとなり」(『江戸名所図会』巻一)

●鍋のぞき―鍋の中を覗き込むこと。品のない行為とされる。「天皇の御製に民の鍋覗キ」(宝曆七(一七五七))『川柳評万句合』「にうりやのねんごろぶりハなべのぞき」(明和元(一七六四))『川柳評万句合』(義) ●浅草川―隅田川の別称。宮戸川、大川とも。 ●三又―前号「中洲」の項参照。 ●中洲―前号参照。 ●その洲―原本は「洌」。「洌」は「洲」の俗用。「高洌の色町中の丁」(天和二(一六八二)刊『好色一代男』巻五の五) ●鶏卵のふは〱―卵料理の一。「玉子ふわ〱 たま子をあげて玉子のかき三分一だしたまりいりぎけをいれよくふかせて出し候かたく候へばあしく候」(寛永二〇(一六四三)刊『料理物語』第十六 さかなの部)「卵ふは

卵をつぶし水醬油か出し醬油か入常のごとく仕候酒を入申は悪敷候鍋へつよくこげ付申候大形能出来申候時はなべの内の卵にそこ爰に穴をあけいり酒を水にて薄のべ申候てつき込少煮てよし」(元禄二(一六八九)刊『合類日用料理抄』巻五)

●銅杓子 銅製の杓子。「下女は又それ／＼に金じやくし片手に目黒のせんば煮を盛時骨かしらをゑりて清十郎にと気をつくるもうたてし」(貞享三(一六八六)刊『好色五人女』巻一の二) 原本は「杓」。「杓」は「杓」の譌字。(『同文通考』) ●新地 埋め立てなどで新規に造成した土地。前号「中洲」の項参照。 ●地祇 天上の「あまつかみ」に対する、地上にいる土着の神。 ●たかまの腹 天上にあるとされる神の世界である高天原(たかまのほら)たかまがはら)のもじり。 原本は「腰」。「腰」は「腹」の訛字。(『倭楷正訛』) ●四季庵 前号該当項参照。 以下、万年屋まで料理茶屋十八軒を名寄せ風に列挙する。 ●きん／＼ 身なりを当世風に整え、得意気に振舞うことや様子。 またそのような金持ちをいう。「きん／＼ 欣々と書りつはなる事をいふ 是は欣り然と軍書に多く有それより出たり着もの着かへさかやきそり髪ゆひたるとききれいなればおのづから心のうちよろこぶその内よろこび面にあらわれたるていなり」(安永七(一七七八)刊『胡蝶夢』) 「只意気なる御仕成にして。 女を見るに至ては。 卒然として俯て仕廻ふ則かくの如くなれば。 誰もこれを通とはとらの皮ごころも。 身の金たるを以たま／＼ 冴の華事有といへとも。 其実はは無墮也。(安永四(一七七五)刊『後編風俗

通』) ●ぶき／＼ ぶつぶつ。 粒だっているさまをいう。 ●麦飯 大麦のみ、または麦を米に混ぜて炊いたもの。「しかし麦飯も適／＼はくるしからぬものなれば麦飯はむぎめしと知て田舎風で菜なしに喰がよし」(宝暦五(一七五五)刊『禁現大福帳』五之巻) ●卓子

台 中国風の食卓。 卓子(卓袱) は中国料理と和風料理とを混和した料理。 大皿に盛った料理を取り分けて食べる。「食卓とは食物を乗する机の名なり食卓台といへるは清土の洒落を真似る人には似合ぬ片言なり扱食卓或は卓子など、い、て食物の名と思えるは弥 拙しと或人は云れどこれも入ほかとおぼゆ夫本朝の風に御膳上り申と饗膳配膳など、云すべて膳を称して俗間食物に通ず故食卓召されと計云ても御膳召上られひと云様成義と同じ扱食卓畿内に流布すること京師祇園の下河原に佐野屋嘉兵衛と云もの享保年中に長崎より上京して初て大碗十二の食卓を料理し弘めけるこれ京師浪花にての食卓料理店の初とかや嘉兵衛娘はんといえる老婆近頃まで存命せり則今の佐野屋の祖なり大坂にて彼是食卓料理数多ひろめたれども野堂町の貴得齋ほど久敷つぎきたるはなし」(文化三(一八〇六)刊『嗚呼矣草』巻之二) ●四ツ足 足が四本ある獸。「**罽**よふなにかをくひなんすぞ**罽**した事さ先当時くはぬ物は四ツ足で駕舁と炬燵やくら」(安永八(一七七九)頃刊『駅舎三友』) ●魚飯 魚類を用いた飯料理。「魚おろし身をすりてゆがきよくもみてかなずひのふにてこす／＼めしつねのごとくにたきよくむれてのち魚をまぜる」(享和元(一八〇一)刊『料理早指南』二) ●料

「名詞「料理」を動詞化した語。「いあんでうしを」**いあん**もちつとあつく

してくんなきへいわしときすのほうろくやき。か喜のイヤカもせんば。葉付

大根。ありがてへわへ**いあん**料るもんだよ」(天明七(一七八七)

序『総籬』●大酒大量の酒を飲むこと。また、その人。「焚噺が

もんやぶりのちたいしゆてがら門破も後の大酒で。手柄のほどが世よに高たか」(宝曆六(一七五六)

刊『風俗八色談』卷之三)●台の物新吉原で仕出し始めた料理膳。

台の上に松竹梅などを飾り、料理を盛り付けたもの。「一向宗の仏

だんのやうな台の物に大根をせいがい浪にきり柿梅干のいるいあまた

つみて持いづる」(明和六(一七六九)序跋『郭中奇譚』●大尽舞

吉原で流行した小歌の一。二十五段に及ぶ詞章から適宜段を選択

して歌い、舞われた。各段末は「ハアホホ大尽舞を見さいな」で終

わる。「ホ、四海の浪もおだやかに治る御代こそ目出たけれハ、ホ、

大尽舞を見さいな」(享和四(一八〇四)成『直伝大尽舞』)●どつ

さくさ「どさくさ」に同じ。混雑している状態。混乱している状態。

乱れ騒いでいる状態。「傾城けいせいの。昼寐ひるぬ程に思ひ詰しぼ。とふぞ今一チ

度お顔が見たいと。屋敷しほキ方の女中方が。芝居しば行キか何んぞの様に

夜の九ツからどつさくさ。道は飛とやらかけるやら。外八文字も一文

字」(明和七(一七七〇)初演『神靈矢口渡』第一)●なら茶見世

奈良茶飯を提供する店。奈良茶飯は茶飯に豆腐汁や煮豆、栗など

を添えた飯。「きん所じよの百ひやくせうもかうさくをやめて。酒屋さかや水茶屋みづちや。

あるひはならちやみせ。などしておもひがけなき。銭せにもふけするも。

ありがたき利生りせうなるぞかし」(天明九(一七八九)刊『通気粹語伝』

第五)

《翻刻》

されはよ夏も半過此三ツまたの三ツはくみし白髪はくはつたる老翁ろうをうあり汀あつさに

暑あつささを凌つりんと釣つりをたれてぞ居いたりける(丁付なしウ)

尊御夫婦ごふうふこの翁おきなをつくく〜と見給みたまに白髪みたれ乱みだれておごのことしたゞ口斗

むぐ〜と生いきて居いるとはしられける 尊翁ひざの膝ひざもとへよらせ給たまひ翁おきなの

年はいくつぞと問とせ給たまへはふりかへりされば候ま此翁こゝろあんまりの長生

に年としもいくつか忘わすれて候ましかし蒼海さうかい変へんじて桑田そうでんとなり中洲ちゆうしゅう変へんして新地

となること凡た拾しゆ四五度たび(丁付なしオ)迄までは覚おぼたりと申まければ 尊また又

〜背せ中なかをたゞきいつの神代むまの生なれぞとゞはせ給たまへは翁おきなかいふ乱らん鬢びん

七代老翁しちだいろうをう五代ごだい是これ皆みな翁おきなか出生しゆつせう後ごなり翁おきなもとより夏なつまけすれば此江こゝろの

辺へに万年住居まんねんぢゆうをなして候まと口くちをむぐ〜いひければ成程なりほど夏なつは川辺かわべの

ことこつちて斗涼とらやまざと八百万やちまんの神かみ〜も年とし〜こゝてすゝしめん

と(丁付なしウ) 神楽かみの歌うたをそつくり給たま

神楽かみうた

春はるはうたゝね氣きをのべ紙してふいて木枕きまくら氣きをつけてさせてやるヨラ、

いさせてにならしやんせよ

夏なつは涼すずみにやかたをつけてうへへのるなら棹さほてつきや楫かぢをとりや

ヨラ、いとりににならしやん(丁付なしオ) せよ

秋あきは月見つきみに約束やくそくしても人にまたせてまじ〜とうそをつくヨラ、い

つぎてにならしやんせよ

冬は雪の夜さそさむかるといくと火鉢を気をつけて出しかける

ヲ、い出してにならしやんせよ(丁付なしウ)

とうたひかなでしより年々ふへし乙女子は

千代吉 哥吉 若吉 おぬい おてる 佐野吉 おかの 靄次し

け吉 豊吉 吉次 政吉 伊勢吉 美濃吉 おぎん 菊次 かね

吉 大吉 宮吉 おます おたみ 富吉 おゆき 小吉 此吉

梅吉 初吉なり 藤本堂 十寸見堂(中五オ)

これ天乙女の世話やくなりますみを号して辰公といふされとも神慮

に叶ひしはぼつとり娘のお幸也これなん常盤津文字継といふ神楽を

奏す乙女子の親玉といひ常盤津のゆかりによつて玉松亭といふ舟か

くと呼かけるは

玉松亭 布袋屋 八幡屋 海老屋 鮎子屋(中五ウ) 夷屋 富

岡屋 大黒屋 西宮 嶋屋 三升屋 相模屋 藤本屋 丁子屋

それより五月廿八日川辺に出茶屋建並て此川つらを見おるせは

吉野丘庫に川一高尾 夷一川漕並て浄留理長うたこはいろおどり

人形つかひ猿廻し数万の挑灯奇羅星のこし玉屋 鍵屋の玉火

流星天をも衝ぬく風情也(中六オ) でんがくしぎやきかは焼酒

西瓜の立うり瓜夏桃あなたこなたへ漕ちがふさて又陸には砂場

そばにしき団子に大仏餅いくよ餅に蛇目酢ゆで枝大豆に唐もろ

こし錐のたてともなかりけりうしろに見ゆる大のぼりは大坂下り

早崎京之助蜜柑といへる人間か鳥かわからぬ上竿奴ありこなた

は鶴一身ぶりこはいろ(中六ウ) 小供狂言硝子細工其外種

の見物に諸人の足をぞと、めける汀の出茶やは九十三軒

伏見屋 小松屋 山吹 夷屋 備後屋 二葉 太田屋 若松屋

丁子屋 いせ屋 奥州屋 桐屋 松よし 大和屋 若葉や 上

総屋 長崎 藤よし 扇屋 成瀬屋 升屋 伊豆屋 相模屋

さ、波 松坂屋 鶴川屋 明石や 笹屋 湊屋 三河屋(中七

オ) 桔梗屋 大村屋 蔦屋 菊本や 千とせ屋 大和屋 福富

屋 宮城野 市川や 駿河屋 丸屋 小嶋屋 高麗屋 紀伊国や

丁子屋 武蔵や 幾田屋 若菜や 相模屋 亀甲屋 さ、波 扇

屋 鶴屋 松よし 大和屋 若菜や 若松屋 いせや 増見屋

八ツ藤 越前屋 奥州屋 桐屋 森川屋 上総屋 今村屋 山本

屋 平野屋 相模や おしまや 豊竹屋 金井屋(中七ウ) 亀

屋 中村屋 いせや かし浦や いね田や ことぶき 八橋 伊

豆屋 松村 梅松 松枝 小川屋 岡田屋 藤屋

《語釈》

●三ツはくみし甚だしく高齢な様子となる意の動詞「みづはぐむ」を「三ツまた」に掛けたもの。「爰に住なせるあるじはいかなる御法師ぞと見しに、思ひの外なる女の臆闕て三輪組、髪は霜を抓つて眼は入かたの月影かすかに」(貞享三(一六八六)刊『好色一代女』卷一の一) ●釣をたれて漢語の成語「垂釣」の訓読。釣りをするの意。「さてまたぎよそのせきせうはつりたれてあげまぎにあそ

ぶものを」(元禄一六(一七〇三)刊『松の葉』卷二「卅三 ひとがしやまはつけい」) ●おご〓オゴノリ。刺身のつまや糊の原料となる海藻。「海髪」カインツ也藻(『合類節用集』) ●むぐぐ〓「もぐもぐ」に同じ。「出にやしよくをくひかゝつて居て。口をむぐぐしなからみせへ出るおも入」(天明六(一七八六)刊『客衆肝照子』「まへたれ出」) ●蒼海変じて桑田となり〓世の移り変わりの激しいことを表す成語「滄海桑田」(「桑田滄海」・「桑田碧海」とも)による。「桑田碧海は庸医の薬箱持も諳ずる所」(安永五(一七七六)刊『風俗問答』)「中洲変じて新地となること凡拾四五度」は誇張。●乱鬢七代老爺五代〓「天神(神代)七代」と「地神五代」をもじつたもの。「乱鬢」は手入れをしていない乱れた髪。「らんひんに成てかみゆひおひ廻ハシ」(『川柳評万句合』明和五(一七六八)義) ●夏まけ〓夏の暑さで衰弱すること。暑気あたり。「夏まけもせぬ武者ふりと見まひいゝ」(『川柳評万句合』安永九(一七八〇)満) ●のべ紙〓上質な鼻紙として使用する小杉原紙(杉原紙の小判のもの)のこと。「鼻紙は、當道においては、男女ともに小杉原を本とす。男のもつには、小はゞの小杉はぬるし、展の大はゞを用ゆべし」(延宝六(一六七八)叙『色道大鏡』卷第二)「氣をのべ」と掛ける。●木枕〓木製の枕。箱形や丸太のままなど、形状は多様。「お前まへ髪わしや振袖の頭よりもつもり〓しこんたん夢のまくらの木枕も二ツならべは和らかく」(安永五(一七七六)刊『愛かしこ』) ●やかた〓屋形船の略。「夏の半より秋の始迄は日毎に出違ふ船遊び樓の数

は何万艘といふ事を知らず」(明和三(一七六六)刊『当世座持話』卷二) 船頭が屋根に乗って水棹を扱うこともあった。●まじ〓〓関心を持たない、素知らぬ態度・平気な顔でいるさま。「元日にいけまじ〓とよみかへり」(『川柳評万句合』宝曆一三(一七六三)満) ●乙女子〓以後に列挙される千代吉以下初吉までの二十七名の女芸者を指す。●天乙女の世話やく〓藤本堂・十寸見堂の二軒の見番(検査)を指す。●常磐津文字継〓未詳。「常磐津節(略) 男子名取ニハ常磐津某太夫ト云。婦女ハ常磐津文字某ト云」(『守貞謾稿』卷之二十三) ●玉松亭〓玉松亭以下、丁子屋までの十四軒は船宿。●五月廿八日〓両国の川開きの日。納涼の期間は八月二十八日まで続いた。「五月廿八日浅草川川開 今夜初テ両国橋ノ南辺ニ於テ花火ヲ上ルナリ諸人見物ノ船多ク又陸ニテモ群集ス今夜ヨリ川岸ノ茶店夜半ニ至ル迄有之毎軒絹張行燈ニ種々ノ絵ヲカキタルヲ釣リ茶店食店等小提灯ヲ多ク掛ル茶店平日ハ日暮限リ也今日ヨリ夜ヲ聴ス其他観場及ビ音曲或講釈ノヨセト云席等モ今日ヨリ夜行ヲ聴ス今夜大花火アリテ後納涼中両三面又大花火アリ其費ハ江戸中船宿及ビ両国辺茶店食店ヨリ募之也納涼ハ専ラ屋根舟ニ乗シ浅草川ヲ逍遥シ又両国橋下ニツナキ涼ムヲ橋間ニス、ムト云大花火ナキ夜ハ遊客ノ需ニ応テ金一分以上焚之」(『守貞謾稿』卷之二十七) ●出茶屋〓物見遊山などで人が集まる場所に、葎簀張などの簡素な構えで出店している茶屋。「神宮寺の門前なる出茶屋にこしかけて、久七に酒はないかと尋れば」(元

緑七（一六九四）刊『好色万金丹』巻五の四）●吉野Ⅱ吉野以下、一川までは屋根船の船名。●浄留理Ⅱ浄瑠璃。「そのそばに浄留理をかたる東洲が来て。はなしてゐると」（明和七（一七七〇）刊カ『遊子方言』）当時通用の表記。●こはいろⅡ声色。役者の舞台でのセリフ回しの特徴を真似る芸。「文字が読るにしたがひて。鼓吹物を見て談議の真似を大谷広治が声色で仕覚え」（宝曆六（一七五六）刊『風俗八色談』四之巻）●人形つかひⅡここでは「南京あやつり」だと思われる。「南京あやつり」は京四条の小芝居で行われていたものが、永らくの中絶後に安永期の江戸で再興した。人形は人形浄瑠璃の手遣いの人形と違い、糸繰りによつて操る。「牽糸傀儡古を以て新しく田舎道者の目を悦しめ」（安永六（一七七七）刊『放屁論後編』）●猿廻しⅡ中洲では、現在も見られるいわゆる猿廻しの他にも、猿を使った興行があった。『中洲雀』（安永六（一七七七）序）では「猿の軽業見るもの有れ共壯士気なくして馬鹿らしく見へ」とあり、同年刊の黄表紙『四国猿後日曲馬』には「くらのうへに両そくかためてかけまするこれをなつてのなかの一本すぎと申ます」と口上し、疾走している馬上で猿が扇を持って直立している場面がある。●玉屋鍵屋Ⅱ両国の川開きで競い合った花火屋の屋号。「筒の中から飛出る玉屋が手ぎは闇夜の錠を明る鍵屋が趣向ソリヤ花火といふ程こそあれ流星其処に居て見物是に向ふの河岸から橋の上まで人なだれを打どよめき」（宝曆一三（一七六三）刊『根南志具佐』四之巻）●玉火Ⅱ打ち上げ花火の意。「玉屋の玉火やんや屋根舟」（『俳諧艦』

六編）●でんがくⅡ種々の食材に味噌を塗って焼いたもの。「串セザレバ田楽ト云因ナシト云トモ今俗諸物ニ味噌ヲ付テ焼タルハ皆形ヲ云ズ田楽ト云唯コンニヤクノミ串セズ焼サルモ田楽ト云（略）魚類ヲモ味噌ヲ付テ焼タルヲ田楽ト云」（『守貞謾稿』後集巻之一）『でんがくやきたてくし』「田楽焼立は串をあげて食」（明和年間（一七六四—一七七二）刊『よるのすかき』）「でんがく」以下「夏桃」までは小船で売り回っているもの。●しぎやきⅡナスに味噌をつけて焼いた料理。製法は時代、地域によつて変わる。「茄子鳴焼 京阪ニテハナシブノテンガクト云江戸ニテハナスノシキヤキト云京阪ニテハ茄子ノ皮ヲ去リニツ三ツニキリ竹串ニ二ツ三ツツ、貫通キ胡麻油ヲ付ケ糍味曾ニ白糖ヲ加ヘスリテ両面ントモニ付之ヲ焼ク江戸ニテモ同制ナレトモ赤味曾ニ砂糖加ヘ付焼ニスル也」（『守貞謾稿』後集巻之一）「直にかの座敷へまかりて見ればしぎやきをくひていたりしを。此人つとよりて其しぎやきをつまみてくひければゆひみそだらけになりたり」（宝曆四（一七五四）刊『魂胆惣勘定』巻之中）●かば焼Ⅱウナギの蒲焼。「江戸にては浅草川深川辺の産を江戸前とよびて賞す。他所より出すを旅うなぎと云」（安永四（一七七五）刊『物類称呼』巻之二）以下にあるように、本作の当時は常設の店舗はなく、振り売りなどで売られた。また、蒲焼はそれ単品で食するのが普通だった。「うなぎの蒲焼は天明のはじめ上野山下仏店にて大和屋といへるもの初めて売出す其比は飯を此方より持参せしと聞近來はいつ方も飯をそへて売りまた茶碗もりなどとふもあり」（天保四（一八三三）跋『世

のすかた』●西瓜の立うり『立うり』は「裁うり」の宛字かと思われる。江戸では果実を水菓子と呼び、そのように記した看板を立てて売った。スイカを適宜切つて供する店は通常では赤い行燈を看板とした。「げいもべいいくらやみにてすいくわを人のあたまと思ひでばぼうちやうにてすつぱり／＼ときりちらすこれをげいもべいがすいくわの五人ぎりとは申なりげいもべいあかいかみではつたあんどんにてよく／＼みればぎりすてしはすいくわゆへ」(享和四(一八〇四)序『五人切西瓜斬売』)●夏桃『通常より早く、夏に収穫されるモモ、スモモ。「赤イ方見せて夏桃積で置き」(『誹風柳多留』一〇八・二八)●陸『原本は「陸」。「陸」は「陸」の訛字。(『倭楷正訛』)●砂場そば『大坂砂場にあつたうどんそば屋和泉屋が高名。江戸への進出時期は不明。「和泉屋のうどんそば 砂場／＼とうたはれていさましげ也賑はしきを風味として」(安永六(一七七七)刊『富貴地座位』下)●にしき団子『未詳。●大仏餅『京都名物であつた餅に倣つて江戸で製した餅。「根元は京誓願寺前にてこれを製す今以て堂上方へも召さる至て其風味格別なり又方広寺大仏殿の前」(ありこれ又好味なり江戸 浅草にて製するはこれを倣つて大仏餅のめうもく)●近世数品の餅ありいが餅さつさ餅あん餅くり餅の類ひ名目を以てす近世数品の餅ありいが餅さつさ餅あん餅くり餅の類ひ多く堤重杉折に盛りて美を尽せり」(享保一九(一七三四)刊『本朝世事談綺』卷之一)●いくよ餅『江戸名物の餅。方々で売つていた。「根元は両国橋西詰にあり前は鉄炮町に住してすこしき餅を商ふ。このものいと」(おつとわらひじゆんにかし)此者の妹にかもと云ありこの女の夫は蔵宿の某にて大百姓なり

かれしめ 渠と示し元禄十七年にはじめて廊をかまふ其餅甚味美にし て栄ふ今所々この名あるはこれに准もの也何ゆへに幾世餅と名付たりや」(『本朝世事談綺』卷之一)●蛇目酢『江戸に数店舗あつた有名なすし屋。またそのすし。「蛇の目すしは木偶人町に定見世の屋たい。黄昏より。出」(天明九(一七八九)刊『中洲の花美』)●早崎京之助蜜柑『当時上方から下つてきた軽業師。「安永の頃、早崎京之介とて軽業師有。道成寺の白拍子と成て釣鐘より飛出るを軽業にて、難波新地其餘諸方にて見せたりしが、大にはやりて京之介クククと言」(文化一四(一八一七)奥書『浪花見聞雑語』)●隨筆百花苑』第七卷による)「太夫京之介一本はしらかたてさし大あたり／＼」「太夫京之介まつりてうちんのきよくもちさみせん引きながらあゆむ」(天明四(一七八四)刊『野暮大臣南郭遊』)●上竿奴『寛永一〇(一六七〇)刊本『中華若木詩抄』下巻に晏同叔「上竿奴」の七絶あり。釈に「上竿奴ト云ハ。竿ヲ。十丈モ。二十丈モ。ツイデ。其上ヘノボリテ。種々ノ曲ヲシテ」とある。●鶴一『松川鶴市。評判の高かつた声色遣いの芸人。「鶴市が声色はその人そこに在が如し」(安永六(一七七七)刊『放屁論後編』)●小供狂言『子どもの役者だけで演じる芝居。「うたもいやだ。ぶんごもいやだ。子どもも狂言をききたい。これよりきやうげんの初り」(安永七(一七七八)刊『契情買虎之巻』第四)●硝子細工『ガラス製の工芸品。「浮絵を見るものは壺中の仙を思ひ硝子細工にたかる群衆は夏の氷柱かと疑ふ」(『根南志具佐』四之巻)●葉湯『葉効を持つ温泉の湯。「江

戸ノ葉湯ハ伊豆及ビ箱根ノ諸温泉ノ湯ヲ用フ」(『守貞謾稿』卷之二十五) または葉類を混ぜた湯。この場合は後者。「三木一草」「五木一草」「五木八草」などといい、種々の葉草などを煮出したりして湯に入れる。

《翻刻》

毎日毎夜此所であつさをさくる諸人の往来は尽ぬ此繁花さて又こゝに葉湯あり名づけてあづま湯治といふこれは此頃此所で陰神陽神庭たゞきといふ鳥にひよんなることを習(中八才)ひ給ひ陰神大きくあつくなり無性にのぼせ給ひければ御のぼせを引下んと葉湯を以て御洗足つかひ給ひしことよりして終に此湯ぞ始りけるそもこゝ此葉湯のはじまりは先祖は葉調經といふ唐人医者此湯をやたらに浴ければ百四十九才をたもつたり今又長崎梅見まで段々家に伝来(中八ウ)してこれを朝晩あびければこととして九十八歳也これを世上へ広めんととうこゝに風呂をしつらふ保養湯は三匁つぽ風呂といひ又浄清湯共いふ葉方は

ゑんじゆの枝 此の枝 くはの枝 もの枝 やなきの枝(中九才)

又痛所持病には吾妻風呂にて浴するなり

一名黄帝のうり家風呂ともいふ尤上り湯なし

その葉方は

霍香 大黃 芍薬 縮沙 川芎 甘草 当帰 輕粉 莪木 薰陸
升麻 茯苓 木香 良姜 滑石 沈香 防風 檳榔子 丁子

紅花 肉桂 人參小(中九ウ)

それより安摩導引八ツ子の瀧これ則上り湯也又みたらしの瀧といふありこれは神風や御裳濯川の流を汲て笕を以て是を落すこれにて湯あがりの口をそゝく又香をきかせてのぼせを下ケ又若き女四五人居て浴する人のとりあつかいをして此湯の講尺くはしくする也尤俗へ通(中十才)つるためしかた噺にさせるがよいいはれをきけば有がたしと諸人此湯をしんするもの多しよし又不慮に穢るゝとも跡にて此清浄湯にて清めるとはさて氣のついたることども也此湯いく風呂はいらうか昼の四ツからくるゝまで勝手次第のことなればその引附ケの案内の茶屋それ吸物よ肴(中十ウ)よと座敷へはこひつ下ケつすれはつる取落す吸物わん三ツ椀菓子わんわんゝといふのはこれやゑのころ嶋ひたものさはる手にあし原枝もさはらば落附の吸物好なたのしみも秋津すきく蓼くふ虫虫養ひの御保養にはこゝにまさつたことぞなきげにやむかしもかゝるためし唐の帝(中十一才)の温泉宮ちつとはそれにも似た鳥鳥のぎやうずいする様にちよつと入てはきゝめが見へず湯めぐりならぬ水のほとりめぐりめくれる群客は又とたぐひは夏の遊偏に此地にとゞめける(中十一ウ)

《語釈》

●庭たゞきセキレイの異名。尾を上下に振る習性を見、伊弉諾・伊弉冉の二神が夫婦交合の道を得したとされる。「こいおしえどり」「いもせどり」などとも。●楽調経未詳。『傷寒雜病論』を著した張仲景のもじりか。●長崎梅見未詳。●ゑんじゆエンジユ。マメ科の落葉高木。「槐 肝経気分ノ薬也」(正徳二(一七一二)序 『和漢三才図会』卷八十三) 以下の薬方の注はこれを略す。●黄帝のうり家風呂未詳。●導引本来は道教の体操療法。当時は按摩と混同されている例が多い。●神風や御裳灌川源経信の「きみかよはつきじとぞおもふかみ風やみもすがはのすまむかぎりは」(『後拾遺和歌集』四五〇)などの歌に詠まれる句。謡曲「御裳灌」をふまえるか。●講尺講釈。当時通用の表記。「長老高座にて申さるハ 昨晩談じたる次を今ばんも講尺いたす事也」(元禄四(一六九二)刊『軽口露がはなし』巻の五) ●しかた嘶仕方話。身振りを交えてする話。「古風の話は迂遠にして理を備へ近頃は洒零過ぎあぢししかたばなしかくこと」(安永二(一七七三)序『聞上手 二篇』) ●引附ケ引付部屋。引付座敷。客をまず通しておく部屋。「引付ざしき見通シの安房宮」(『誹風柳多留』一二〇・二四) ●三ツ椀煮物椀、飯椀、汁椀の三つ。●座敷原本は「座」。『座』は「座」の俗字。(『俗書正譌』) ●菓子原本は「果」。旁「果」は「果」の訛字。(『倭楷正訛』) ●ゑのころ嶋「椀」の音を重ねて「わん／＼」から犬(ゑのころ)を引き出し「国産み」の神話において初めに作り出された鳥「淤能碁呂鳥(磯取慮鳥)」をもじったもの。「は

くちにうちまけたるものかんのうちに丸はきにあふて内へかへる事ハならず辻だうのゑんの下にかゝみわたるにおりふしゑのころ一疋来るをとらへていたき是にてちとハラをあたくめてゐける所へ」(寛永十三(一六三六)刊『きのふはけふの物語』下) ●落附宿や店に到着して最初に口にする飲食物。「おち付の味噌吸物は汁をわざとすつたばかり」(文化二(一八一四)刊『人心視機関』下) ●虫養ひ「虫おさえ」とも。一時的に空腹をしのぐための食べ物。また、食欲以外にもいう。「此所にて餅などとのへ。少しは腹の虫をやしなひ。たがひにちからをつけ合。はなしものして。漸沼津の駅につく」(享和三(一八〇三)刊『道中膝栗毛 後編』下) ●似た物鳥よく似ていることのとえ「似たものは鳥」から。「かつ山ぬしにいた人があれば。いふことはおさんせんけれどよし大しんにたものはからず。いくらもあるのさ」(安永七(一七七八)刊『一事千金』第二口説品)

以下続く。